

A large, dark, layered rock formation, likely a fossiliferous rock, is shown on a sandy beach. The rock has a distinct horizontal layering and a dark, almost black color. The background is a light-colored, textured sand. A vertical black bar is overlaid on the rock, containing white Japanese text.

四
キ
リ
シ
タ
ン
史
跡
案
内

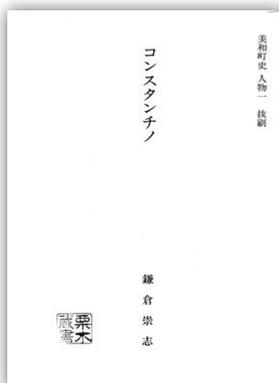
東海地方のキリシタン史跡案内

1 尾張地方のキリシタン史跡

尾張キリシタン発祥の地「花正」

花正は尾張におけるキリスト教宣教の発祥の地である。中世における海部郡は連歌師などによる上方京都との文化的交流があり、隣村の勝幡は、清洲織田家の家老である織田信秀も活動した地であり、織田信長はこの勝幡城で生れている。一五六七年（永禄十）頃に日本人の信者コンスタンチノによりキリスト教の布教が始められた。

彼は故郷の花正に帰って伝道に努め、フロイス神父の許可を得て、花正および周辺の村々で六百名に洗礼を授けた。



鎌倉崇志
『コンスタンチノ』
美和町史人物 抜刷

法光寺

所在地 美和町大字花正字郷中六十六番地 〈地図12〉

一九八五年（昭和六十）頃に、美和町花正の法光寺の住職竹田一夫が、敷地の北側にある雑木の藪の中に塚と二つの供養塔を発見した。また、美和町歴史民族資料館の学芸員鎌倉崇志がその庭にある古い供養塔の笠の上に墨で円に良（コン）の字が書かれているのを見つけ、コンスタンチノとの関係を推測している。一九六八年（昭和四十三）法光寺の屋根裏から、『切支丹宗門記』（一七九九年作成）の写本が発見された。十カ年間に六百人の信徒を得たと称する花正地方の永祿、天正年間の信仰状態について、鎌倉崇志は次のように述べている。

「花正地方は東西各半里に蜂須賀蓮華寺と甚目寺があり、北一里に大塚性海寺があり何れも真言宗の隆盛を極めていた時代である。真宗としては天台宗の古寺院を転宗再興して浄土真宗に改めたが、花正村の人々の檀那寺中法光寺のみはコンスタンチノより十数年前頃此宗に中興している



「法光寺」山門

が、光照寺及び清須の延広寺は未だ出来ていなかった。即ちコンスタンチノがキリスト教をひろめた時代の此の地方は今日の如く一向宗の盛大なものではなく、僅かに真宗の信仰もあつたくらいで強固な信仰心も無かつたと認められる。こうした時期であつたから十カ年間に六百人の信徒を得たと言うのも事実であつたろうと考えられる。然るに七十歳の老人コンスタンチノの死後は完全なる後継者がなく、教会も清須へ移り大波の如く押寄せる此の地方一帯の一向宗信仰に圧倒せられて、遂には禁教時代にも至らぬ前、既に此の地にキリスト教の跡を絶つたものと考えられる。」（鎌倉崇志『コンスタンチノ』）

光照寺

所在地 美和町大字花正郷中二百六十四番地 〈地図12〉

光照寺には本堂庫裡の裏手にクリシタン灯籠があり、その東側の田畑の区域は、かつてのコンスタンチノの屋敷跡ではないかと考えられている。



発見された墨書
「良」のある遺物



法光寺裏庭で発見された
クリシタン遺物

尾張清洲のキリシタン

日本二十六聖人の中の二十名は日本人であり、その内五名は尾張出身者であった。詳細は以下の通り。

- 一、タケ屋コスメ（尾張の良い家柄の出身で名刀劍師、フランシスコ会の伝道士となり、大阪で捕縛された。兄弟のタケ屋レアンも著名な刀劍師で、清洲の自宅をイエズス会に譲渡して上洛したが、一五九六年に病死）
 - 二、茨木パウロ（フロイスが「機械工」と書く職人。）
 - 三、烏丸レオン（フランシスコ会の伝道士であり、ベッド数五十の京都最初の洋式病院「聖アンナ病院」の世話人）。※姓は茨木、故郷は尾張国花正地方（結城了悟神父による）
 - 四、茨木ルイス（ルドビコ。前二者の甥。フランシスコ会員と一緒に住んでいた十二歳の同宿であり、殉教者中では最年少者）
 - 五、パウロ鈴木（説教師で「聖ヨゼフ病院」の世話人。四十九歳）
- 青山玄神父は当時の様子について次のように書いている。



光照寺東側のコンスタンチノ
屋敷跡（推定）



「光照寺」山門

「二五八〇年代の清洲は、織田信雄が秘かに秀吉に対抗する勢力を育てていた町で、革新と建設の意欲に溢れており、八六年には城も新しい瓦屋根に改築され、三重の堀をもつ立派な城下町造りが進められていたからである。恐らく尾張の領主が信雄から豊臣秀次に変わり、清洲の武士層が大きく更迭した一五九二年ごろに、彼らは宣教師の常住する京都に移り、翌九三年に来日したフランシスコ会員の下で、中心的活動グループに属して働くに至ったものであろう。

一五八七年の秀吉による宣教師追放令の発布以来、あまり目立たないようにして伝道していたイエズス会員たちの警告を無視し、公然と伝道に従事するフランシスコ会員には、京都およびその周辺諸地域の古くからの信徒は、察するに長年親しく指導してくれているイエズス会への義理立てもあって、幾分協力し難いものを感じていたであろう」（青山玄「キリシタン時代と明治前期における美濃尾張伝道の性格」『名古屋キリシタン文化研究会会報』32）。



清須城復元図



清須古絵図

タケヤ・コスメの出身地

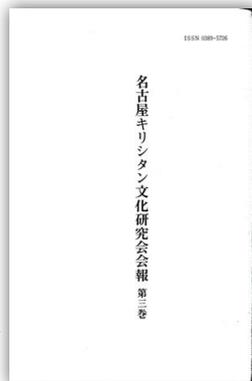
現在も清須町日吉神社北側に「竹屋町」という地名が見られる。清須城下美濃街道から下町に沿った裏町の職人が多く住んでいた場所で、明治の地積図にも字竹屋と記載されている。「寛延旧家集」（一七四八〜一七五〇年）、「那古野府城誌」（寛政〜文政）などによると、清須越をした町民旧家百十五軒のうち清須出身は九十七家で、竹屋町からの人が五名あり、その内四名がタケヤ・コスメと同じ職業の研師である。

- | | | |
|----------|----|----------|
| 竹屋九右衛門 | 研師 | 竹屋町（練屋町） |
| 勘七 | 研師 | 竹屋町（大津町） |
| 桜屋小十郎 | 紺屋 | 竹屋町（常盤町） |
| 竹屋三間忠右衛門 | 研師 | 竹屋町 |
| 竹屋喜参 | 研師 | 竹屋町 |

宣教師フロイスの書き記したタケヤ兄弟は清須城下竹屋町出身の者であり、町名を屋号として自分の名前として京都の町でキリシタン布教奉仕活動をしていた。



現在の竹屋町
町内案内看板



青山玄『名古屋キリシタン文化研究会会報』



現在の清須市竹屋町地図

一本松塚キリシタン処刑場跡

所在地 一宮市緑二丁目十二番地 〈地図29〉

一六三二年（寛永八）尾張藩では宗徒五十七人を捕らえた。その内一宮のポール兵右衛門、その子高木村のシモン・コスモ久三郎、一宮の医師コスモ道閑、レオン庄五郎の四人は印田郷裏常光一本松塚（現在地）で処刑された。尾張藩では初めての火焙りの極刑に処せられた場所であるとレオン・パジェスの『日本切支丹史』や『源敬様御代御記録』の文献記録にある。一九五〇年（昭和二十五）、カトリック名古屋教区により十字架型木高札および石柵が建設されたが、一九六七年（昭和四十二）十一月五日、右木札が腐朽したため、地元の一宮史談会により「水かけ十字碑」が建てられた。一九六九年（昭和四十四）二月、地元の人々四十五名によって新碑と、十字型の記念碑に「水かけ地藏尊」の文字を彫った小碑が建てられた。



キリシタン処刑場跡「一本松塚」
黒龍社境内



一本松処刑場跡の「水かけ地藏尊碑」
一宮市史談会 1967年2月記念碑建立

尾張一宮周辺「キリシタン殉教顕彰碑」

所在地 一宮市大宮一丁目七番一号 カトリック一宮教会

一宮市内は古くから殉教者の供養碑など迫害の歴史を伝える場所が多くあり、「命をかけて信仰を貫いた殉教者を敬いたい」と信者有志が毎年訪れ、祈りを捧げてきた。その苦難や功績を広く周知し、後世に伝えたいとの思いが信者たちから上がり、地元の殉教者を顕彰する碑が二〇〇八年（平成二十）一月三十日に一宮教会敷地道路沿いに建てられた。

顕彰碑「なぐさめ塚」

所在地 一宮市浅野公園南 〈地図30〉

森徳一郎により一九六七年（昭和四十二）、一本松塚跡に建立予定の自然の河石で造った殉教碑を建てることにしたが、敷地が手狭のため浅野公園前に設置した。ただしここは殉教地ではない（資料6）。



一本松塚から移された
印田常光寺の小洞



顕彰碑「なぐさめ塚」

印田常光寺の小祠「水掛地藏尊」

所在地 一宮市印田通三丁目

印田通りに面した臨濟宗常光寺の敷地（旧・印田常光庵）に祠がある。一七五一年〜一七六三年（宝暦年間）印田郷裏・常光一本松塚（現在の緑二丁目十二番地）からこの郷中印田に移設し「水掛地藏尊」を安置した。右上に「為二世安樂也」と銘がある。最近道路整備に伴い小祠の周辺が改装整備された。

扶桑町高木のキリシタン処刑地跡「恵心庵」

所在地 扶桑町高木字桜木三七八番地 〈地図22〉

一六三二年（寛永八）及び一六六〇年代（寛文年間）に、この高木村とその近隣地域では、多くの村民がキリシタンとして処刑された。その霊を弔い、冥福を祈るために、一六九九年（元禄十二）、住人が一体の舟形石仏地藏（高さ二尺七寸で、「有縁無縁三界萬霊等名仏地藏尊」銘をもつ）。

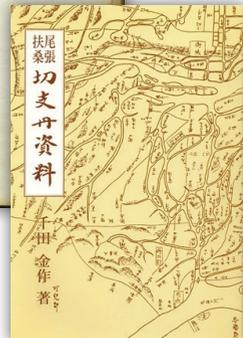


扶桑町高木の「恵心庵」
寛文年間（1660）の
キリシタン処刑地跡遺跡



千田金作
『尾張扶桑切支丹資料』
愛知県郷土資料刊行会
1987年

森徳一郎『尾張切支丹年表・尾張切支丹札所巡礼』
1935年



この地藏尊は文政年間に高雄の白雲寺に移された）を造って、草庵を建てた。この草庵は、そこに恵心と号する尼僧が住んだところから、「恵心庵」と呼ばれたという。

一六三七年（寛永十四）には、丹羽郡諾野村（現在の扶桑町）でキリシタン三百余人が斬罪に処せられたという記録がある。一六六七年（寛文七）には尾張藩の各地で二千人もの切支丹牢払い、斬罪が行なわれた。恵心庵の縁下から西北の畑地にかけて、村方で処刑されたキリシタンを葬った「高木村切支丹塚」があったが、現在は無い。岩倉街道より十間ばかり西へ入ったところは、犬山羽根金常山白雲寺持恵心庵、切支丹類族死罪の者を埋葬した墳墓である。一九三八年（昭和十三）、恵心庵の北隣に住んでいた田島博は、恵心庵境内入口に「切支丹史蹟地本尊地藏大菩薩恵心禅庵」と大書した石柱を建て、一九五二年（昭和二十七）四月には、恵心庵の堂宇を修築拡張した。一九七四年（昭和四十九）八月、恵心庵は遺跡として、扶桑町指定文化財に認定された。そこには扶桑町教育委員会による案内板が立てられている。「扶桑では一六二八年（寛永五）ごろ、一宮の道閑、兵右衛門の二人の伝道士から布教が始まる。当時は既に宗門の圧迫は厳しく、



「恵心庵」内の延命地藏尊



新装なった「恵心庵」案内看板
扶桑町教育委員会による立て看板

その布教の方法は容易でなかった。一六二九年（寛永六）には高木村に於いて、摘発が行われ、百姓治郎右衛門という者が召捕えられ転宗させられている。一六六一年〜一六六三年（寛文年間）に召捕られその後赦された甚三郎、小兵衛、角兵衛らの口述記録を一六六五年（寛文五）高木村庄屋吉右衛門が上書きしたものが小島武宅に残っている。」（『扶桑町史』（資料7、資料8））

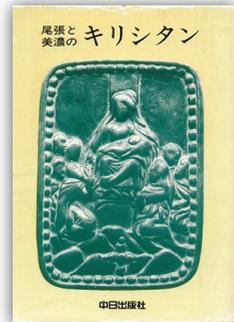
犬山五郎丸の満願寺伝道所跡顕彰碑

所在地 犬山市大字五郎丸満願寺十三番地 〈地図4〉

中村米雄宅の敷地内にある「顕彰碑」は、一九七二年（昭和四十七）に、犬山市大字五郎丸字万願寺十三番地に住んでいた本人が建立したものである。本人が手写した「宗門改め」の資料は、「橋爪地区共有文書」である。中村家は、先祖が橋爪から移って来た人々で代々庄屋格の家柄であった。中村家の居宅は寛文年間キリシタン宗徒が信仰布教活動をしていた道場跡であり、旧真言宗万願寺址である。禁教により破却された後に中村家先祖



中村家奥庭にあるキリシタン
顕彰碑キリシタン伝道所跡



横山住雄『尾張と美濃のキリシタン』

が橋爪から移り住んできたといわれる。昭和の終り頃までは、中村邸の南側に広大な桃畑二反歩があり、そこが寛文の弾圧によるキリシタン宗徒切込み地と伝えられているが、現在それを示すものは何もない（資料9）。

県道五郎丸の殉教者石碑

県道万願寺交差点北西には、赤芽櫓の垣根に沿って小さな社がある。そこには祠があり、「正徳壬辰二年（一七二二）十一月吉日 諸神諸仏諸菩薩」と銘記された石碑が建っている。これは、五郎丸はじめ付近一帯の殉教者を追善するために、当時の中村半右衛門が建立したものである

小牧市岩崎の「キリシタン灯籠」

所在地 小牧市大字岩崎独山一三三五番地 観音寺境内

〈地図5〉



五郎丸万願寺信号角の供養塔

岩崎村で幕府によるキリシタン弾圧があった。一六六三年（寛文三）から一六六七年（寛文七）の間に起こった事件が挙げられる。善右衛門をはじめ十七名がキリシタンとして召し捕られたと岩崎「村鏡」に記載されているのが唯一の記録である。村鏡の作成は事件後四十年経った一七〇八年（宝永五）キリシタン捕縛の記録はさらに五十五年後の一七六三年（宝暦十三年三月）に書き改められていた。キリシタン捕縛は庄屋格の人達の間では、事件後百年経ても語り継がれていた。このキリシタン灯籠は小牧市で唯一の殉教史跡である。

一六四八年（慶安元）十六歳で岩崎に住み着いた岩崎兼松家初代源藏正勝は、江南のキリシタン大名前野将右衛門長康より一五八五年（天正十三）三百石の知行を受け、家臣であった尾張藩士兼松正成の子であった。当時の知識人であり一六七八年（延宝六）四十七歳で歿するまでの三十年間の出来事で、事件を目撃した人である。

一家全員が召し捕られた善右衛門は、この正勝と同様の家族構成であり、同時代に生きた人物である。善右衛門が処刑された場所は、岩崎村郷新田と推定されるが場所は不明である。天保年間、兼松家八代目七左衛門は庄



キリシタン灯籠の脇にある切支丹慰霊碑『信天去地』1953年旧兼松屋敷内に建立。

小牧市岩崎観音寺の「キリシタン灯籠」元兼松家屋敷内にあったもの、現在は岩崎山観音寺境内



屋として事件を伝え聞いていたのであろう。キリシタン善右衛門の霊を弔い自分の屋敷地内の奥まった場所に織部型の灯籠を設置した。

旧兼松家屋敷跡で発見された灯籠は、竿が地中に掘建てされ、柱の部分が十字形をなし正面キリスト像が彫られている。灯籠は花崗岩で出来ており、竿の形は十字形が相当変形して、文様も無く時代が下がる形式で、江戸後期の一八三〇年〜一八四三年（天保年間）の製作年代と推定されるキリシタン灯籠である。この灯籠は小牧市指定有形文化財として現在岩崎山観音寺境内に移されている（資料10）。

岩崎山観音寺境内の延命地藏尊

所在地 小牧市大字岩崎字独山一三三五番地

岩崎山の観音寺境内小洞に「貞享四丁卯年（一六八七）五月廿四日」銘が刻まれた死者の霊を弔う延命地藏尊で、尾張地方のキリシタン処刑場で見かけられる地藏尊である。元の場所は岩崎村西部の郷新田の辻といわれ、キリシタン宗徒として処刑された善右衛門一家の居た場所と推定され、



『村鏡』 岩崎村丹羽寅治郎
扣

「切支丹捕縛の覚え」『村鏡』小牧での寛文年間切支丹迫害を記した古文書で唯一の記録

一六六一年～一六七二年（寛文一～寛文十二）のキリシタン捕縛に係があるかも知れない。

大治町馬嶋明眼院の灯籠

所在地 海部郡大治町馬島北割一四番地

一六六一年（寛文元年一月）、犬山城下五郎丸で神父一名が捕えられ、同時に高木村をはじめ諸村から多数のキリシタンが検挙された。六月二十五日、尾張藩は切支丹奉行を置いて嚴重に取り締まった。『視聽実記四』には「寛文元年（一六六一）二月二十二日、馬嶋南坊（のちの明眼院）住職篠島配流」と記載されている。

中日新聞文化欄の記事「忘れ水探訪」（二〇〇八年十二月二十五日）に次のような記事が掲載された。

「キリシタン哀史を秘める織部灯籠もある。犬山のキリシタンたちが逃げ込んだ際に持ち込んだという。前住職の奥様渡辺りつさん（八十七才）



馬嶋眼科院のキリシタン灯籠遺跡



観音寺小洞の「延命地藏尊石仏」
1668年（貞享四）五月廿四日の銘がある。



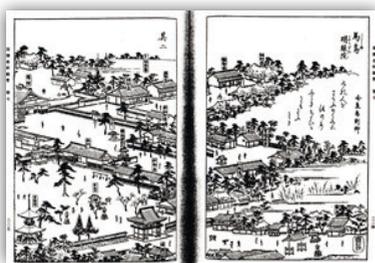
観音寺にある
延命地藏

は『かぼった時の住職は流刑となったそうで、灯籠も以前は隠れるように旧庫裏の坪庭にあった』と話す。」

犬山のキリシタンが持ち込んだというキリシタン灯籠は、現在荒廃した境内の西側白山社のある小山の裾にポツンと佇んでいる。一六二四年～一六七二年（寛永～寛文年間）は尾張北部地方ではキリシタン弾圧の嵐が吹き荒れた時代である。一六六六年（寛文六）には、尾張国丹羽郡塔ノ地村より名古屋松原刑場跡へ処刑者の霊を弔うため大仏を移した記録があり現在の栄國寺に安置されて本尊となっている。

キリシタン宗徒はきびしい取締りと捕縛を逃れるため、搜索の目が届かない場所として勅願所であった寺院に逃れてきたものと思われる。この織部灯籠には文様があり灯籠作成期の迷彩時代、一六一五年～一六四三年（元和寛永期）のものと思われる、総高百六十センチ、尊像高さ九十センチ、花崗岩で造られている（資料11）。

2 名古屋市内のキリシタン史跡



尾張名所図会にある
馬嶋眼科院



馬嶋眼科院山門跡



馬嶋眼科院跡

浄土宗西山派清涼山栄國寺

所在地 名古屋市中区橋二丁目二十一・三十八番地

〈地図1〉

栄國寺は浄土宗西山派清涼山と号し、尾張二代藩主光友が、一六六五年（寛文五）に建立したものであり、もと白川町にあった西光院第九世任空可信を開山としたものである。この地域はもと、千本松原と称する刑場及び死罪・病死・行倒れの人々を埋葬し、かつ、キリシタン宗徒二百余人を処刑したところで、藩主は刑場を土器野に移しその跡に菩提のために建立したものである。市文化財指定の阿弥陀如来、仏足石、千人塚、円空仏、キリシタン遺物等数多くある。境内にある「切支丹塚」には、一六四九年（慶安二）町岡新兵衛が建立した石造供養碑があり「南無阿弥陀仏三界萬靈等」と銘記されている（資料12）。



栄國寺西门



町岡新兵衛建立の供養塔
「南無阿弥陀仏三界萬靈等」銘
1649年（慶安二）

境内の地藏尊

また碑の周りには処刑者の慰霊と冥福を願い、高さ百五十七センチの地藏尊が建っている。これは当時尾北地方で多く作られた延命地藏尊である。村人の捕縛処刑は農民にとって人手が少なくなることであり、無念でもあった人々が建てたものであろうと思われる。

栄國寺の地藏尊は尾張北部の地藏尊と同じく、キリシタン宗徒の冥福を祈って建立されたものである。この地藏尊の由来は定かではないが、その大きな造刻の確かな容姿からして尾北地区で元禄期にキリシタン宗徒の菩提を弔うため建立された地藏仏と推察される。『尾張名陽図会』には栄國寺境内にある切支丹塚に石塔阿弥陀仏と記載され、五体の舟形地藏尊と柁の樹木がある。

カトリック教会が建てた顕彰碑

一九九七年（平成九）十一月二十三日、日本二十六聖人殉教四百年を記念し、カトリック名古屋教区長野村純一司教は、住職の若松啓雅師の了解を得て、その遺徳を慰めんとこの殉教地栄國寺境内の町岡新兵衛が建立し



キリシタン塚の延命地藏尊石仏群



阿弥陀如来坐像
(市指定文化財)

た供養塔「南無阿弥陀仏三界万霊等」の横に殉教史を記した顕彰碑を建立した。それ以後、名古屋教区は毎年二月の第一土曜日に殉教者顕彰のミサを行なっている。

「キリシタン史跡公園」計画

二〇〇六年（平成十八）五月六日、栄國寺若松啓雅住職より、栄國寺南側の土地四百坪が売地となり、その内千人塚の南側四十坪を取得したとの連絡があった。隣地の名古屋市の公園ドングリ広場とあわせて、キリシタンの歴史史跡公園を作り保存をはかる目的であった。現在は境内南側の市道に史跡公園の入り口が設けられ、史跡がよく見えるようになった。

栄國寺に眠る明治十一年銘墓石の主

栄國寺境内の墓地に町岡新兵衛が建立した慰霊碑があり、その側に西洋式墓石がある。墓石の主は一体誰であるか寺にも由来を記したものはない、墓碑に刻まれた銘「昂那（アンナ）鈴木墓 一八七八年（明治十二）七月十九日眠 享年二歳」より推測してみる。



栄國寺史跡公園キリシタン塚



キリシタン顕彰碑
カトリック名古屋教区建立

名古屋地区で最初のキリスト教の布教はロシア正教の信者による。一八七三年（明治六）に「東京ニコライ（露語学校）の生徒、影田、宮本の二人が名古屋区南中ノ町に耶蘇教の仮教場を設けた」ことに始まる。日本基督一致教会の名古屋伝道開始は一八七八年（明治十一）十二月、東京麴町教会によつて、実質的には米国オランダ改革派ミツションによつて行われている。その直前同九月頃名古屋の鈴木鉦次郎から東京新栄橋教会の小川義綏牧師に伝道者要請の手紙があった。「鈴木鉦次郎は一八六九年（明治二年一月五日）、横浜で米国長老派宣教師タムソンから洗礼を受けた元宮津藩士で、一八七八年（明治十一）頃は名古屋裁判所判事の公務の余暇に福音を講じ、毎日退庁後に聖書を輪読し、彼の部下から数名の求道者が生れてきたからであった。」（真山光彌 『尾張名古屋のキリスト教―名古屋教会の草創期―』）

この人が墓碑銘にある鈴木姓を名乗った当時の信者ではないかと推測される。一八七三年（明治六）二月二十四日、太政官布告を以てキリシタン禁制の高札は撤去されて、キリスト教が解禁されたものの、名古屋で未だ理解が得られていなかった当時は、禁教下で洗礼を受けた鈴木の子を



「昂那（アンナ）鈴木墓」銘墓碑



切支丹供養塔と顕彰碑

刻んだ墓碑を安置してくれる場所は他になく、栄國寺の寛大な措置を受け埋葬をしたのではないかと推測される。

尾張藩処刑場跡（土器野処刑場）

所在地 清洲市新川町上河原六番地先 〈地図13〉

江戸時代の尾張藩は罪人を広小路牢屋敷に収容し、その中で極悪人を極刑に処して、新川町土器野（かわらけの）新田の上河原で斬首した。それまで処刑場は名古屋城下町外れの千本松原（現在の中区橋にある栄國寺付近）にあったが、尾張二代藩主光友が一六六五年（寛文五）この地に移している。名鉄本線の新川橋駅北側を線路沿いに東へ向い「北中野公園」の先の小路を入った住宅地に挟まれたところに墓地がある。ここより東の高岳工場敷地にかけては処刑場跡で、一八九七年（明治三十）二月ここに立てられた「尾張藩処刑場跡」と刻まれた案内石柱は、最近になって美濃街道沿いの瑞正寺境内に移されている。

尾張藩では凶悪犯の場合、罪状を書いた立て札を先頭にして罪人を裸



美濃路街道より処刑場跡へ入る辻
処刑場跡入口のお休み所「飴茶屋」



尾張藩処刑場「土器野処刑場」跡

馬に乗せ広小路牢屋敷から処刑場まで市中引き回し、五条橋を渡って枇杷島から美濃街道を進み、新川橋の手前瑞正寺に立ち寄り、一八一三年（文化十年五月）建立の高さ約四メートルの刑死者供養の大宝塔前で合掌礼拝し刑場に



瑞正寺の「尾張藩処刑場碑」

至った。現在の美濃街道は一部古い町並みを残しているが、瑞正寺とお休み処「飴茶屋」の間を北向きに入って名鉄高架下をくぐり細道を東に約百メートル行った民家に挟まれた奥の線路脇にある墓地が刑場跡である。

八事興正寺にあるキリシタン灯籠

所在地 名古屋市昭和区八事本町 〈地図8〉

一九七二年（昭和四十六）の春、神言会の青山玄神父が興正寺境内墓地の織部灯籠を調査した。「その時は墓地内で織部灯籠四基を見つけたが、



八事山興正寺山門



尾張藩処刑場跡碑と慰霊塔

かねて平田伸夫氏よりもう一基寺院の中庭にあると聞いていたので、目をあため興正寺の住職を訪れた。本堂前から廊下を経て通された小さな中庭の一隅には、かなり風化した花崗岩の竿部をもつ織部灯籠が建っていた。竿部の高さは約八十センチで、製作年代は不明だが、表面下半分に手を合わせて立つ人像が、幼稚に浅く陽刻してある。像は法衣のようなものを着ており、頭部が真ん丸に近い形で、四頭身ほどの大きさである。竿部の裏には、(サ)・(カン)・(カ)という三つの梵字が縦に陰刻されていて、住職の説明によると、これは、観音、不動、地藏を意味するという。灯籠は昔から興正寺門前の電車道のそばに建っていたが、一九四〇年(昭和十五)に門を修復した時、現在地に移された」(『キリシタン文化研究会会報』21)。

名古屋の浦上キリシタン史跡 西掛所・牢屋敷跡

所在地 名古屋市中区 西本願寺名古屋別院内 〈地図3〉

名古屋藩に預けられたのは、主として浦上家野郷城之越の人々で、戸主



西掛所跡 (現在の西本願寺名古屋別院)



興正寺本堂奥、普門園北の竹林にあるキリシタン灯籠

の男性六〇名は一八七〇年（明治三年一月五日）、立山役所に集められ、大波止で乗船し、瀬戸内海を経て大阪八軒屋という船着き場に着いた。一同は腰紐で数珠つなぎとなつて徒歩六日目に名古屋に着き、広小路の獄舎（現在の名古屋市中区栄三丁目）に收容された。ここは藩の牢屋敷で、揚屋・新牢・雁木牢・大牢・小牢・六間牢・女牢に分れ、矢来・忍び返しを取り付けた高塀に囲まれていた。記録によれば、改心しない者をこの雁木牢にいて、改心を迫つたという。女子流配者が收容されたのは西掛所で、当時は西本願寺掛所といわれていた。

浦上キリシタン牢死者の埋葬場所

所在地 名古屋市昭和区八事本町興正寺西山神葬墓地附近

〈地図8〉

外国政府の強硬な抗議により、明治政府は一八七三年（明治六）二月二十四日、キリシタン禁制の高札を撤去し、続く三月十四日「太政官達」を以つて「長崎県下異宗徒帰籍」が発令され、愛知県も浦上キリシタンを



広小路本町の牢屋敷跡

長崎へ送還する。信徒たちは、陸路大阪へ、大阪から海路にて同年四月二十八日に長崎に無事帰郷した。浦上信徒の牢死者八十二名については、『井上秀齋伝道日記』に「囚人の死体を名古屋の東方神道埋葬墓地に埋葬」と記されている。その場所は、現在の興正寺西山の神葬墓地の南端の山林と考えられる。一九五三年（昭和二十八）に行われた建築工事の折、人骨の入った南蛮壺のような素焼きの細長い壺が掘り出されている。青山玄神父は一九六八年（昭和四十三）に調査した結果を「名古屋藩預け浦上信徒の牢死者埋葬跡」（『キリシタン文化研究』21）で発表した。さらに「浦上キリシタンの名古屋藩預け」（同22）で名古屋市の蓬左文庫で発見された『御預異宗徒御引渡一卷』、『明治一年雑記録』、『明治四辛未雑記録』の調査結果と外国文書を参照しその歴史を明らかにした。

名古屋城内茶室「織部堂」前の織部灯笼

所在地 名古屋市中区本丸一番一号



興正寺西方の信号交差点より北入り



神葬墓地入口の石柱

一六四四年（正保元）に、名古屋城内の奥女中がキリシタン宗徒として召し捕えられたという記録がある。当時はまだキリシタンに対する取締りは厳しくなかった。

名古屋城内の茶室「織部堂」前に「織部灯籠」がある。この石灯籠は、如春庵森川勘一郎によれば、熱田加藤家伝来の「わが国でもっとも古くかつ由緒正しい唯一の織部灯籠」である。古田織部正重勝（一五四四年～一六一五年）は名古屋城築城後、数寄屋普請を行った時、名古屋市熱田区伝馬にあつた加藤図書助の館に滞在しており、その当時好んで造らせた灯籠である（中日新聞「忘れ水探訪」資料13）。

土岐頼芸（よりなり）の子、古田織部正重勝は、美濃国（現在の本巣郡本巣町山口）の生まれ。重勝は幼名を景安といい、のちに左介、従五位下織部正重然となる。信長の死後秀吉に仕えて武将として活動する。また、茶人としては一五八二年（天正十）頃に千利休と知り合つて弟子となり利休七哲の一人とされる。一五八五年（天正十三）、秀吉が関白になると、織部正の（従五位下）の位階と山城国西岡に所領三万五千石を与えられた。一五八七年（天正十五）のころから大名茶人として活躍する。一五九一年



名古屋城内茶室
「織部堂」前の織部灯籠
茶席「織部堂」前にあり、
熱田加藤家伝来の織部灯籠

(天正十九) 利休亡き後、その地位を継承、豊臣家の筆頭茶人となった。

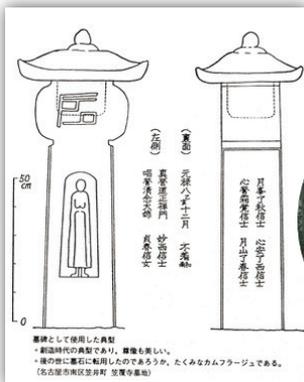
笠寺観音にあるキリシタン灯籠

所在地 名古屋市南区笠寺町上新町八十三番地

名古屋市南区笠寺町の笠覆寺(笠寺観音)墓地に「切支丹灯籠」がある。近年この灯籠の前に立派な案内の石標が建てられた。この灯籠は墓碑として使用されたキリシタン灯籠の創造期の典型であり、キリスト尊像も美しいが、その由来は不詳である。

松田重雄の『全国切支丹灯籠型分類』によると、「この灯籠は時代として、創造時代に属し、尊像はアーチ型イエス像で、尊像は八頭身、竿丈八十五センチメートル、足左右開、竿上大穴あり、元禄八乙亥年(一六九五)十二月、不着和南銘、戒名八名、追刻あり。現状は宝珠・笠・竿あり。岩質は花崗岩異質、墓標として転用されている」とある。

愛知郡高田村のキリシタン



笠覆寺の切支丹灯籠

所在地 名古屋市瑞穂区瑞穂町(名古屋市立大学経済学部構内)

〈地図2〉

瑞穂区雁道町四丁目に住んでいた福島利雄によれば、昔この旧高田村には野墓が数多く散在していたが、昭和初期の耕地整理の時に、それらの墓を各寺に移した。福島家の檀那寺である盛屋寺の老僧の話によれば、むかし多くのキリシタンが処刑されたということである。『尾張徇行記』には、「寛文七年（一六六七）末年在々切支丹宗門ノ者共七百四十五名、外二乳呑子十四名、七月二十八日召捕入牢セシム」とあり、彼等が高田村で同七年十月に処刑されたように書かれている。『古義』や『寛文覚書』『編年大略』その他にも同様に書かれている。

「寛文七年（一六六七）十月のキリシタン大量処刑直後の十一月に、現在名市大構内にある前述した円墳（剣ヶ森古墳）上に天照皇大神を祀る神明社が建立されたが、この円墳の南八十メートル程の所には長さ七十一メートルの前方後円墳、いわゆる「八高古墳」があり、その東南には長さ



旧高田村剣ヶ森古墳
キリシタン処刑地跡



殉教地高田村の現在地図
現在の名古屋市立大学経済学部

八十七メートルの前方後円墳、いわゆる「高田古墳」がある事を考え合わせると、寛文七年の処刑は旧高田村新田字藤塚の村はずれと言ってよい。この淋しい前方後円墳地帯の北側でなされ、その受難者の鎮魂のため、直径二十四メートル、高さ二メートル程の円墳上に神明社が建てられたのかもしれない。神域の面積は約三百坪で、昔はその周囲にめぐらせた堀は水をたたえていたと伝えられている。寛文七年（一六六七）の処刑の三十三年忌に当る元禄十二年（一六九九）五月二十七日に、この神明社の東南二百メートル余の地点に、浄土宗養林寺の末寺信正寺が建立されたことも注目を引く。養林寺は、慶長年間に岐阜から現在の名古屋市中区白川町に移され、寺尾土佐守直政の菩提所とされた寺で、直政は一六五〇年に初代藩主義直公逝去の時に殉死したので、二代藩主光友公は、成瀬正虎の子直龍をその養子となして寺尾家を存続させたが、寺尾直政は藩主義直公や成瀬正虎と同様、キリシタン弾圧には消極的な一人とみなされており、その養子となった直龍も、織部灯籠を愛好するなどして、キリシタンに対する秘かな好意が推測されている人である。神明社は、この地に国立第八高等学校が創立された明治四十年（一九〇七）の十月に、円墳上から約二百メー



浄土宗養林寺の末寺「信正寺」

トル東方の現在地に遷座している」(青山玄 『名古屋キリシタン文化研究会報』54)。

3 知多半島のキリシタン史跡

知多市佐布里誕生堂の織部灯籠

所在地：知多市佐布里地蔵脇 誕生堂 〈地図10〉

知多半島北部の知多市佐布里地蔵脇にある正法院境内の石階段を昇った高台にある誕生堂(真言宗如意寺の塔頭)の庭先右側に織部灯籠が置いてある。佐布里の山里の静かな山間にあり、周辺は新興住宅地であるが梅が丘といわれ梅の産地である(資料14)。



『正法院境内の誕生堂』

犬山城主成瀬正虎と佐布里

一九九三年（平成五）、地元の郷土史研究家の高田幹夫が、この灯籠に関する研究成果「キリシタン灯籠確認記」を発表し、関心をもたれるようになった。高田によると「犬山城主成瀬正虎の息子（寺尾姓）土佐守直龍は『寛文村々覚書』から知られるように、今では知多市になっている佐布里・岡田・大興寺・羽根などの村々を領していた。正虎没後の一六七五年（延宝三）に蟄居させられた理由については、知多市史に『発狂』、犬山里語記と犬山市史に『故あつて』、士林浜廻には『病二臥シ致仕』などと書かれているが、そのまま犬山城内に四十八年も生き永らえたのだから、とても発狂や病臥とは思えない。白林寺を建立した正虎と同様、神仏への尊崇の念が厚く、キリシタンを邪教視することに強い疑念を抱き、幽閉中も犬山城内にあるキリシタン灯籠に掌を合わせていたのではないか」とのことである（地図7）。

正虎が二代目城主となったころ、一六四四年（正保元年六月）に名古屋



真言宗雨宝山「如意寺」



誕生堂脇にある
キリシタン灯籠

城内の奥女中がキリシタンとして召し捕らえられている。正虎は一六三九年（寛永十六）に没した義直の奥方春姫の側近であったことから、キリスト教に傾倒していた可能性が強く、徹底的弾圧を許さなかつたと思われる。尾張藩がキリシタン弾圧に踏み切ったのは正虎隠居一年三ヶ月後の一六六三年（寛文三年三月）であった。この灯籠は、高さ約八十二センチの花崗岩製。かつては佐布里地内のどこかにあり、明治末に地区内から集められた墓石が如意寺西側の崖付近にいったん置かれ、戦後すぐに現在の場所に移されたといい、地元民からは「キリシタン灯籠」と言われている。そして高田は、藩内では摘発の盲点だった知多半島に、隠れキリシタンがいた可能性もあるのではと、結論づけている。

一九九四年（平成六）一月二十三日、地元知多市郷土史研究会主催の灯籠のシンポジウムに出席した青山玄神父は「キリシタンとなんらかの関係がある可能性はある。知多半島に宣教師が来て、キリシタンがいた証拠はないが、ひよつとすると、隠れるという意味で絶好の場所だったかもしれない」と言っている。



犬山城内にある成瀬家屋敷



国宝犬山城

二代目藩主徳川光友と佐布里

二代藩主光友が国元名古屋に在城中、横須賀に出向いたのは十三年間で、二十九回に及ぶという。これは光友が江戸滞在中にマラリヤ性の病に罹り、その後回復したが、はたして、快癒を祈願するためだけの参詣であろうか。光友は近在の神社・仏閣に随分と関心を示している。一六六八年（寛文八年六月一日）に光友が八幡宮を初めて参詣して以来、五回以上も繰り返し参詣している。この時期は尾張藩においてキリシタン弾圧が最も厳しく、各地でキリシタンの捕縛、処刑が行われていた時代であった。藩の処刑場であった千本松原の跡地に栄國寺を建立した光友が、なぜ佐布里延命地蔵尊を参詣していたのか、その胸の内を知ることができない。また、辺境の郷であった佐布里の土地はキリスト教の教えを理解していた成瀬正虎・義龍や光友の庇護を願って、隠れ郷として移り住んだキリシタンがいたかもしれない。

和訳聖書を作成した音吉頌徳記念碑



犬山名鉄ホテル敷地の国宝「如庵」



1980年
音吉頌徳碑周辺整備
完了記事

所在地 愛知県知多郡美浜町小野浦福島 〈地図9〉

約百五十年前、世界で初めて和訳聖書を完成させた知多郡美浜町小野浦出身の岩吉、久吉、乙吉（音吉）を称える碑が小野浦にある。キリスト教徒として世界初の和訳聖書の作成に関わった功績で、日本聖書協会（本部・東京都中央区）などが一九六一年（昭和三十六）、音吉の故郷・美浜町小野浦に記念碑を建て毎年功績を偲んでいるという。一九八〇年（昭和五十五）、地元により碑周辺の園地が整備され記念碑が完成した。その後一九八三年には、音吉たちの漂流物語を描いた故・三浦綾子氏の歴史小説『海嶺』が出版され、この間の事情が広く世間に知られるようになった。

美浜町では、町民の協力で十一年の歳月をかけ、音吉らの足跡巡りを開始、墓の調査から遺骨の搜索・遺灰取りにいたるまでの悲願を達成し、またシンガポールとの交流に発展している。遺灰の帰郷は菩提寺・良参寺境内に音吉顕彰会の手による案内看板が建てられている（資料15）。

東浦町越境寺のキリシタン灯籠



菩提寺良参寺境内の音吉らの墓石



菩提寺良参寺境内の音吉顕彰会案内板



美浜町音吉頌徳碑園地

所在地 知多郡東浦町緒川屋敷二区二十三番地 〈地図11〉

東浦町緒川の越境寺の裏にあるキリシタン灯籠が東浦町指定文化財となっている。越境寺は緒川駅からお嬢坂を上ったところにあり、曹洞宗が多い知多の寺には珍しい日蓮宗の寺である。この灯籠は、隠れキリシタンが礼拝の対象とした灯籠で、材質は、竿・笠ともに天城石、竿の長さは九十センチ、胴回りは百〇五センチ、やや上部が太り、上に笠が乗る。笠は高さ三十八センチ、天に擬宝珠を置き、八角形のなだらかな曲線が広がる。円柱の笠の前後には三断線で縦十七センチ、横十三センチの十字形の模様を貫き、内部は広くくり抜かれ火袋となっている。笠の両側にも十字架と同様の模様を淺彫りにし、その内部に右側三日月、左側日輪を彫り込んでいる。

4 美濃地方のキリシタン史跡



東浦町「越境寺」
のキリシタン灯籠

一六一三年（慶長十八）家康が禁教令を出して以来、キリシタンに対する弾圧は強まった。塩村（旧春里村）への弾圧は特にひどかったようであり、一六二四年〜一七〇三年（寛永・寛文・元禄年間）には過酷な取調べや検挙が度々行われた。一六三八年（寛永十五）には、旧可児郡内の三十三ヶ村がキリシタンを出した村だった。

可児市塩のキリシタン「大の字調べ場」跡

所在地 可児市坂戸字柿ノ木田九二三番地 〈地図15〉

「仕置きのあるのは俗称岡田場又は墨田といわれた村境の山林（可児町坂戸柿ノ木田九二三番地）で、切支丹宗徒をこの地に引き連れ、両手両足をひろげさせて「大の字」形とし、竹で叩く、足でける等の苛酷な調べが一昼夜にわたって続けられた」。（佐藤弥太郎 『春里・塩の切支丹』）



可児の殉教史跡場所地図

甘露寺、向田の処刑地跡坂戸柿ノ木田の位置場



奥村智咲『切支丹の迫害史』1956年版

可児市塩向田のキリシタン塚

所在地 可児市塩字向田一二五八の一 〈地図15〉

信徒を斬刑に処して穴に埋めたと伝えられる「キリシタン塚」跡が向田河原にある。場所は可児町塩向田一二五八の一で旧八幡社跡より北西に約十五間、向田河原に約四坪くらいの穴跡あるといわれているが、現在は水田となり、封土は削られて草が生えており所在は判明できない（資料16）。



可児市塩の甘露寺硯石遺跡

所在地 可児市塩（旧春里村塩）字新田

〈地図14〉

甘露寺の硯石は、坂戸地内の山林で取り調べがあった際、役人が調書作成のために自然石を打ち欠いて硯の代用にしたといわれる。信者とゆかり

向田河原の処刑場跡キリシタン塚遠望
2011年9月撮影



可児市塩の甘露寺



旧道坂戸交差点
キグナス石油 S S 南東角

のある新田（旧キリシタン屋敷）の隣地、甘露寺境内に一九五二年（昭和二十七）に移設された。一九五五年（昭和三十）五月八日、地元とカトリック多治見教会による慰霊祭が行なわれた。一九八七年（昭和六十二）可児市教育委員会により市指定有形文化財に認定され看板が立てられた（資料17）。

御嵩町七御前墓地の遺跡

所在地 可児郡御岳町上之郷謡坂稲葉五二四七番地

〈地図16・17〉

一九八二年（昭和五十六）三月二十一日に上之郷謡坂（うとうざか）の道路工事の折、五輪塔の下から石に刻まれた十字架など三点が発掘された。謡坂は中山道のなかでも登りの急な坂であり、疲れを忘れようと唄を謡って通ったところから名付けられたとされる。七御前墓地であるがこれについては、尾張書物奉行が著した一七五六年（宝暦六）の「濃陽略」や新撰「美濃誌」にも、古くから五輪の塔が祀られているが、どのような古跡で



甘露寺に移された
「硯石」遺物



仕置場から硯石を甘露寺に運搬

あるか判らないと記されている。この遺物の発見により、キリシタンとは無縁とされていた御嵩町にも、弾圧の中、信仰を守って生き続けたキリシタンのいたことが証しされた。なお今日まで木村家に残っているのは、水神碑のみで、その他の遺物はすべて「中山道みたけ館」二階に常設展示されている。また七御前遺跡は御嵩町観光協会により「七御前キリシタン信仰」の案内板やマリア像が建てられ、毎年八月十五日には平和祈年祭が行われている。

幸福寺と卒塔婆「絶仏」の文字がある石塔

所在地 可児郡御岳町上之郷謡坂地内

七御前遺跡の北側の谷を隔てた山中に「幸福寺跡」ある。山裾の竹林と杉木立に覆われた山道を登ると三百坪程度の平坦地に建物の基壇石組や古い墓碑やその他の石造物が散乱している。幸福寺は一六六四年（寛文四）まで上之郷謡坂の山中にあった寺で、土岐郡平岩村（現瑞浪市）の鷹巣山開元院の曹洞宗の末寺であった。寺歴は一四四一年（嘉吉元）に始まり謡



平和の聖マリア像「マリアの里」
1987年8月23日、御嵩町観光協会建立



御嵩七御前墓地の遺跡
(平和マリア像の裏手)

坂村に移築されてからは周辺の小原村、前沢村、津橋村、樋ヶ洞村、西洞村の寺として栄えたが、二百二十年後の一六六四年（寛文四）に突如として廃寺となった。地元ではこの場所を釈迦堂と呼んでおり、その跡地には一七二八年（享保三）十月吉日銘「夜念仏供養」として建てられた卒塔婆がある。その六字名号銘文は「南無阿弥絶仏」裏面には「同行拾二人正」とあり、本来なら「陀仏」であるべきところが「絶仏」となっている。一九九〇年（平成二）、地元の有志がこの卒塔婆が傾き倒れそうになったので建て直したところ自然石を加工した聖母マリア像が見つかった。一七二八年（享保三）までは、謡坂周辺にキリシタン信徒がいたことが確かめられたが、現在でも地元謡坂地区に移された幸福寺で毎年七月十五日に徹夜で行なわれる夜念仏はキリシタンの復活徹夜祭に相当する行事と関係があると思われる。

御岳町郷土館「中山道みたけ館」

所在地 岐阜県可児郡御岳町御岳一三八九の一



幸福寺（釈迦堂）の夜念仏供養塔「南無阿弥絶仏」裏面に「同行拾二人正」の銘



幸福寺（釈迦堂）のある山地入口

岐阜県可児市御嵩町は犬山から約五キロの地にある。奈良時代に東山道が通り、後には中山道の御嵩宿が設けられ、現在は名鉄広見線の終点の御嵩駅がある。町の中心には八一五年（弘仁六）創建とされる元興寺と御嵩本陣との間に、「みたけ館」がある。これは一階が図書館、二階が郷土資料館になっていおり、二階の展示場に、これまでに発見されたキリシタン遺物が常設展示されている。

笠松の処刑場大白（だいうす）塚跡

所在地 岐阜県羽島郡笠松町長池地先

名鉄竹鼻線西笠松駅、木曽川河川敷 〈地図33〉

江戸時代、笠松には陣屋が置かれ、年貢の徴収・民事・裁判を行っていた。一六六二年（寛文二）に美濃郡代が可児・徳野からこの地に移され陣屋（岐阜県羽島郡笠松町県町）を構えた。陣屋は明治政府の誕生により廃止、跡地には一八六八年（慶応四）笠松県庁が置かれ、明治六年県庁舎が



笠松の処刑場

「大白塚跡」

木曽川橋南右岸の河川敷にある標識「大白塚」はだいうす塚と読み、デウスは天主の意である。

岐阜市に移るまで美濃の天領支配の拠点として、岐阜市の中心であった。

羽島郡笠松の木曾川右岸の木曾川橋南方の河岸に大白塚跡の木柱案内標識がある。江戸時代中期羽島郡笠松町長池に旗本津田家が陣屋を構えていた。津田秀政は織田信長、豊臣秀吉、徳川家康に仕え、領地は江戸中期以降美濃と丹波（京都府亀岡）で代官所を置いていた。美濃国の領地は、葉栗郡の長池村、三つ屋村、藤掛村、光法寺村、おはげ村と、西濃の安八郡白鳥村、不破郡平尾村、本巣郡三日市場村、可児郡長洞村、矢戸村、室原村を合わせた四千十一石。その関係で塩村のキリシタンは美濃代官の処刑場にて斬罪となり「だいうす塚」に埋められた（資料19）。

笠松善光寺 笠松陣屋の牢屋敷跡

所在地 岐阜市笠松下新町四十二番地 〈地図32〉

善光寺は、寺伝によると、浄土宗西山派禅林寺・光明寺両本山に属した専養寺の末庵「智暁庵」から興った寺で、以前は笠松陣屋の牢屋があった。一七三六年（元文元）恵澄居士・恵教尼夫妻が敷地五百六十余坪を寄進し、



笠松善光寺の元処刑場にある石碑

元河川敷のだいうす塚に建っていた二つ石碑で1879年、笠松陣屋の牢屋敷跡に移設されている。両方とも「天保十五甲辰十一月造立之」で碑の銘文は「南無阿彌陀佛」「南無妙法蓮華経」。

斬罪された亡者の霊を弔うため一字を建てたとされる。庵主第一世は開基の妻（智達恵教浄行尼）であり専養寺で得道した後、入庵し斬罪者および牢死者菩提のために、念仏を唱えたという。五世の称円は、一八八〇年（明治十三）入庵し、廃寺同様に荒れ果てた庵の再興を図り、一八八六年（明治十九）に官有地であった斬首場の払い下げを受け、境内百三十五坪を拡張した。現在の善光寺は旧鮎鮎街道沿いの市街地にあり、入り口は狭いが奥の広い境内地の東側に処刑地大白塚跡から移設した石碑が二基建てられている。